

9割が「家庭の経済力影響」 英語民間試験に高校の反応：朝日新聞デジタル

2020年度から始まる[大学入学共通テスト](#)で英語の4技能（読む・聞く・話す・書く）を測るために民間試験を活用することについて、なぜ多くの大学や高校は「問題がある」と考えているのか。民間試験を実施する際の課題や影響についての考えを、10の選択肢を示して、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4段階で回答してもらった。

大学では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計がもっとも多かったのは、「家庭の経済力が影響する」で83%。続いて「大学での活用方法がさまざままでわかりにくい」が77%、「各試験間の成績について公平性が担保できない」と「受験希望の生徒が全員受験できない」「[地域格差](#)が広がる」がいずれも76%と多かった。

高校でも、大学と同様に「家庭の経済力」93%、「大学での活用方法」92%、「各試験間の公平性」89%、「[地域格差](#)」85%などが多かった。大学の回答よりも割合が大きかったのは、「高校（大学）の授業を変える必要がある」（高校69%、大学26%）の43%差、「システムにトラブルが生じる可能性がある」（高校80%、大学64%）の16%差、「大学での活用方法」（高校92%、大学77%）の15%差などだった。

「ひらく 日本の大学」調査では、昨年も大学に同じ質問をした。昨年より割合が増えたのは、「システムトラブル」（64%、12ポイント増）、「家庭の経済力」（83%、5ポイント増）などだった。逆に割合が減ったものでは「成績が下位層に集中し、識別が困難」（44%、10ポイント減）が目立った。

昨年は「問題はない」としながら、今年は考えを180度変えた大学が多いのは私立大だ。「問題がある」は昨年の42%から63%に急増した。今回考えを変えた私大を見ると、「（高校の英語が）民間試験ありきの授業になってしまわないか。受験での[地域格差](#)も大きい」（昭和大）、「各試験間の成績を公平に比較する明確な『横軸』がなく、運用面での懸念が払拭（ふっしょく）できない」（[龍谷大](#)）、「生徒自身の能力に関わらず、居住地などにより受験機会の不平等・経済的負担が生じる」（[近畿大](#)）といった意見が目立った。

「問題がある」とした高校では、「幼いころから民間試験を受ける生徒が増え、[英語教育](#)が良からぬ方向に進んで基礎学力が身につかなくなる懸念がある」（[栃木県立栃木女子](#)）。「複数の検定試験を同一の尺度で測ることは難しい」（[東京都](#)の私立明星）といった意見が多かった。（増谷文生）